

NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介「ホスピス運動の創始者 シシリー・ソンドース」

シャーリー・ドゥブレイ 著
若林一美ら 訳
日本看護協会出版会 1989年10月初版

はじめに

現代ホスピスの歴史は、1967年イギリス・ロンドンにシシリー・ソンドースが創設した聖クリストファー・ホスピスから始まると言われている。聖クリストファー・ホスピスは、どのようにして生まれたのだろうか。またシシリー先生とは。今回は本書を紹介する。

なおシシリー先生は、本書が上梓されてから15年後、2005年7月14日永眠された。享年87歳。ご冥福をお祈りする。

著者の紹介

BBCテレビのプロデューサーを経て、現在はフリーランスジャーナリスト。

本書の内容・感想

シシリー・ソンドースは、第1次世界大戦の終わった1918年、イギリス・ロンドンで、裕福な家庭の長女として生まれた。父親は成功したビジネスマンで豪放磊落、対照的に母親は厳格で内向的な性格であった。

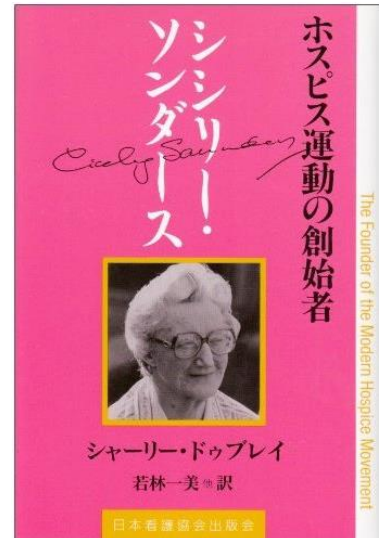
中等教育が終わり、聖アン校に入学。政治学、哲学、経済学を学び始めたが、第二次世界大戦が勃発。時代の要請で、応急手当と家庭看護分野の試験を受けることになった。学生時代の彼女の心をとらえたものは実は看護の世界であったが、両親に反対され終わっていた。ここに至り看護師になろうと決意した。

他方、シシリーは生まれつき背骨が曲がっていて、長い時間看護の仕事をしていると必ず背中への痛みにおそわれた。ボトレーズ・パークで最期のトレーニングをする段に、とうとう限界に達し医師の診察を受けた。辞めるように忠告された。常に患者とともにいられる職を希望し、そこでアルモナー、今で言う医療ソーシャルワーカーになることを決意した。

1947年秋、40歳で手遅れの男性がん患者デヴィット・タマスの担当となった。亡くなるまでに会った回数は25回にすぎなかったが、二人の関係は深い友情、さらに愛情にまで発展した。デヴィットに安らぎを与えられたということから、彼女は自分には末期患者に苦痛を和らげる何かがあるのではないかと思い始めていた。またこのことのみならず、彼女は死を目前にした人と心を共にした経験を通して、末期患者に対し肉体的苦痛緩和のための技術だけでなく、精神面、感情面、社会面等に対するトータルなケアが如何に大切であるかも感じ始めていた。こうしたケアは1940年代の病院においては見落とされていた。この体験が、聖クリストファー・ホスピスの誕生の原点となった。

死にゆく人のために仕事をしたい。昼はアルモナーとして働き、夜は聖ルカでボランティア婦長として働くようになった。聖ルカは死にゆく人のための施設である。

聖ルカの婦長のひとり、1905年にこう書いている。「どの患者もみな、死期が迫っているという点で似通っている。しかし一人一人は、それぞれ自分自身のユニークな人生を生きている。それぞれの個の尊厳を絶対的なものとして大切にすること、その人はその人自身であってほかのだれでもない…そういう、いわば



人格の中心に魂が触れるように努めること、それがわれわれの義務なのだ。」

この考え方はシシリーにとって新しいものではなかった。だが、その理論が実践されているのを見るのは喜びであった。さらに、彼女が新鮮な驚きを感じたのはスタッフの薬の使い方だった。以前働いていた病院では、治癒し得ない状態であることがわかっているのに、無益な手術と治療が続けられていた。ところが、ここに来て初めて精神的にも肉体的にも痛みから解放されている患者を彼女は見た。その秘訣は、痛みが襲ってくる前に定期的に鎮痛剤を与えることだった。また注射ではなくできるだけ口から与えていた。なぜなら、患者にとってもその方が楽だし家庭でもできるからだ。このいかにも単純な方法が、やがてシシリーの鎮痛剤の用い方の基礎になった。さらに、これが今日の鎮痛剤使用の 5 原則(WHO 方式)の礎石にもなったのである。

末期患者のそばにいたいという彼女の願いは弱まることはなかった。「死にゆく人たちの問題が、ますます私の心を占領してくる。とくにがんが進んでしまって、希望が持てない人たちのことが気になる。あの人たちが医者に見放されてしまったと感じるのは、ある程度当然のような気がする。彼らの苦痛をやわらげることが不可能なのだろうか。そういう道は私はなんとか見つけだしたい。それを実現するただひとつの方法は私が医者になることだ。」難関を突破し、1957年4月彼女は医師となった。もう 39 歳が近づいていた。

1959年、遂に行動の時が来た。その先どう動けばいいのか確実なことはわからないながらも、やるべく仕事を信じ行動に出た。医療的、組織的、財政的問題を解決するために、「要望書」と「概要書」を各界の指導者に送った。市民にもサインや援助を求め、多くの有志や善意ある人々から、多額の支援を得ることに成功する。要望書の一部、紹介する。

「人々の多くができるだけ長く家で暮らせるというのは大切なことであり、また大多数の家庭が状況をうまくやり繰りできることも事実であるが、技術を備えた施設での世話が必要になったときにも家にとどまらざるをえない人が多いこと、そして主な理由の一つが適切な施設が足りないことにあるのは明らかだ。」

1967年6月、ついに最初の住人がロンドン郊外の住宅街の一面に建てられた聖クリストファー・ホスピスへ到着した。病室には広々としたバルコニーがつき、至るところに植物や花が置かれ、大きな窓からあたたかな陽ざしがさし込む。道行く人の話し声や子どもたちの笑い声が病室にも快く響いてくる。死を迎える場所であるだけでなく生きる場所でもある。コミュニティの中にある小宇宙なのだ。デヴィット・タマスと出会い、計画した時から約 20 年の月日が経っていた。

シシリー先生が大切にしていた言葉は、『“Be there” (共にある)』であったという。私も、患者様ともご家族様とも、地元の人とも、“Be there”。これを胸にしまって、明日から医療を提供していきたい。

理事 井上 林太郎